IV. *Chrysanthemum wakasaense* (2n=36). Journ. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2, 9: 41-58.

Summary

1. *Chrysanthemum wakasaense*, a segmental allotetraploid with 2n=36 was found to occur newly in the inland area, while it has been regarded as a coastal species distributing locally on the slopes along the Japan Sea coast of Fukui, Kyoto, Hyogo and Tottori prefectures. The inland area extends to the northern and eastern parts of the Lake Biwa, *i. e.* the province of Wakasa, the Ibuki mountain region, the northern parts of Suzuka mountain regions and upper and middle regions of the River Ibi.

2. The inland strains were quite like to the coastal strains in external morphology and morphological diversity. A total of 158 clones of inland strains were found to be tetraploid with 2n=36 except for two clones with 2n=35 and 2n=37, each.

3. The inland strains were observed growing in sunny dry slopes, roadsides along the mountain paths and calcareous open grasslands.

○ちかごろ問題になっているアワビタケについて（小林義雄）Yosio Kobayasi: On *Pleurotus cystidiosus* O. K. Miller

数年前に台湾で4枚のきのこ切手が発売され，それに鮑茹（ハウクー）というものが含まれていた。この学名はまだ知られて居らず，台湾名のみが示されたのは例のないことであった。1974年に第9回国際食用きのこ会議が東京で開かれた際に台湾の研究者により，このきのこが学名未詳のまま栽培状況が発表された。種々の広葉樹に寄生して白腐れを起す害菌ではあるが，大型の子実体があわびに似た感触があり，特有な味を具え，しかも容易に培養出来るため，今は洋菌（ツクリタケ）と肩を並べて市場に出まわっている。その培養の方法は稲藁とおが屑を等量に混ぜ糠やとうもろこし粉などを加えポリプロピレンの袋に詰め滅菌したものを培養基とし，これに種菌を加え菌糸の充満するのを待つという極めて簡単な方法であるという，子実体の発生は 25～33°C がよいために亜熱帯の台湾では外気又は室温で充分ということであった。この会議の翌年に印刷された報告書に学名が載っているかは知らないが， 1975 年の末に台北の台湾農業試験場の Mushroom Research Laboratory の所員とアメリカの Rockville にある American Type Culture Collection の所員と共著で台湾から送られた菌株の同定の結果が Mycologia 誌上に発表された。種名は *Pleurotus cystidiosus* であった。

さてこの種が学界に発表されたのもそう古いことではない。 Kaufert (1935) が *P.*

corticalis Fr. の名で発表した菌が特徴のある Coremium 型の不完全型を生ずることに興味を抱いた Miller は，1969年に新種 *P. cystidiosus* として発表した。いまこの原典により本種の特徴を見ると，分生子型は短小なピン形で，自生の子実体のある腐材上や培養菌糸上に無数に群生し，不完全菌の *Anthomycopsis* に相当する。即ち Oidium 状

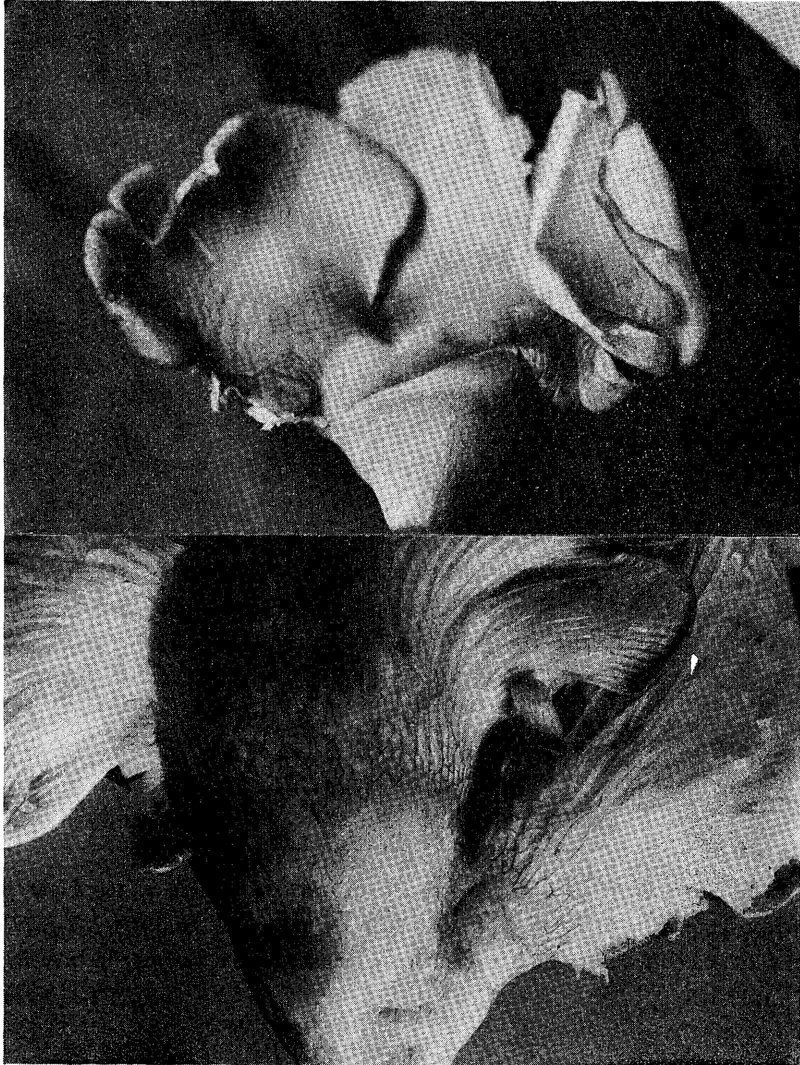


図1. アワビタケ. 上. 子実体上面 ×1/2. 下. 下面 ×6/7.

に鎖生する長楕円形の分生子が黒色の Coremium の頭部表面に密生する。子実体の傘の表面には密着性の小鱗片とともに特徴のある傘面シスチジアが形成される。褶は短小側生の柄に線状をなして流れ，相隣るものが結びついて居る。ベールは欠けている。胞子は著しく長く 11-17×4.2-5 μ. 遺伝的にはヘテロタリック，4 極性。培養最適温は 28°C。

さて昨年師走もおしつまったころ，私は台北の市場へ種々の食用きのこを求めて巡った。龍山寺，円環，中山北路一段等の商場である。そこでは色々な興味ある発見があったが，とくに野菜店では 2～3 種のキクラゲ，2 種のシロキクラゲ，金針茄（培養エノキタケ），洋茄（ツクリタケ）と称するものを求めることが出来た。それと同時に問題のきのこの生品も見出すことが出来た。店の主人に名を尋ねても異口同音に知らぬという。メモに台湾名を記して示しても異るという。取りつく島もなく，大きな 1 株を10元（約70円）で求めた。写真のものがこれである（図 1）。

このきのこに最も近いものはヒラタケである。しかし傘の表面はヒラタケが淡黄褐色から鼠色まで変化があるのに比べ常に淡鼠色のようである。子実体の大きさは大体同じで，肉は稍厚くしまっている。柄にはヒラタケのような著しい毛状突起がなく，胞子はヒラタケが 7.5-11×3-4 μ の大きさであるのに比べ，ずっと長い。私の求めた子実体は Miller の記載に比べると傘面シスチジアが著しくなく，殆んど平滑で，柄の下面に流れたひだは連結して網目をつくっていた。培養状況によって多少の変異が現れるのかも知れない。

この 1～2 年の間に我国でもこのきのこが野外で見出せるようになった。昨年夏の終りごろ，偶々私が科学博物館に居った時にきのこを持って鑑定を求めに来た者が居た。見れば正に問題のきのこであった。また林業試験場の青島博士は日本の樹木を犯す菌として本菌に注目し昨年の菌学会大会でオオヒラタケの名で紹介した。今後如何なる具合に本菌が日本の自然界に拡るか，或は夏の食用菌として一般に流行するか，私には判らない。

私は本菌の和名としては台湾名と同音の鮑茹（ハウクー）と同義語である鮑茸（アワビタケ）を採用したいと思う。すでにヒラタケの方言としてこの名があるが，一般には用いられて居ない。なおアワビタケの分布は現在北米の Indiana 州其他の諸州，南アフリカの Johannesburg，台湾，日本ということになっている。

文献　Miller O.K. (1969) A new species of *Pleurotus* with a coremioid imperfect stage, in Mycologia **61**: 887-893.　Jong S.C. & Peng J.T. (1975) Identity and cultivation of a new commercial mushroom in Taiwan, in Mycologia **67**: 1235-1238.

（国立科学博物館）